

アーモスト大学の名誉学位

北垣 宗治

去る五月二十五日に、上野直蔵総長がアーモスト大学から名誉学位 Doctor of Humane Letters (名誉文化博士、略称 L・H・D) を受領された。同志社人としてアーモストの名誉学位を受けた人は新島襄社長 (名誉法学博士 L・D・一八八九年)、原田助^{たすく}総長 (名誉神学博士 D・D・一九一〇年) について、上野総長が三人目である。三人が別々の博士号であることも、また原田総長から上野総長まで実に七〇年があいていたことも、アーモスト大学のことを考えてみる上では興味深い事実である。

新島が L・D・をもらった一八八九年は

彼が永眠する僅か半年前に当り、いわばタツチの差でこの名誉にあずかることができた。『新島詳年譜』によればこの年七月二日付の

アーモスト大学理事会からの通知は八月下旬に京都に届いたらしい。当時の状況から推して、新島への名誉学位授与の推進者が、アーモスト大学総長としてすでに十三年目であった J・H・シーリー博士であったと考えて差支えあるまい。現にシーリーは七月二十日付で新島に名誉学位を受けるよう激励する手紙を書いている。新島自身はそれをもらう資格がないので辞退したいと考え、宣教師たちに相談した。辞退するな、同志社のためにこれ

を受けよ、というのが宣教師たちの一致した意見だった。当時の徳富猪一郎あての手紙にも「小生は兼て無位無冠の身を以て一生を畢へんと思ひ居候に、右様の学位を受くるとは実に意外の出来事にて大に赤面致し居候」とある。

新島はめったに自嘲する人ではなかったが、この時には人にむかって L・D・が重荷すぎることを訴え、これは Lazy Lane Dog (怠け者の、よたよた歩く犬) の意味にとるならば自分にぴったりです、と述べたという。大学設立をめざして、満身創痍の状況で奮闘していた新島の、きびしい言葉と受取るべきであろう。

それにしても、何故「法学博士」なのか。新島が法律に強かったとは、どの伝記にも出てこない。元来名誉学位は、大学がすぐれた学問的、文化的、社会的業績をあげた人物を表彰する意味で、その人を自分の大学の名誉卒業生に数えるために創設されたものである。十八世紀の英国の文豪サミュエル・ジョンソンはオックスフォード大学から L・D・を授与された。彼もまた法律とは特別にかかわりのない人だった。その他沢山の例から言



上野総長に対する学位記

原田総長はよく同志社中興の祖といわれる。熊本バンドの一員で、同志社卒業後神戸教会の牧師となり、神戸女学院でも教えた。一九〇七年から一九九年まで同志社の総長をつとめ、この間に専門学校令にもとづく同志社大学を出発させた。晩年にいわゆる「原田騒動」が起こって同志社を退く。しかし原田は歴

代総長の中では海老名や湯浅と並ぶ、国際主義的な広い視野をもった総長であった。一九一〇年、原田はスコットランドのエディンバラで開かれた世界宣教大会に日本代表として出席したが、このときエディンバラ大学はカンタベリー大主教や世界宣教大会議長ジョン・Ｒ・モットとともに、原田にＬＬ・Ｄ・を授与した。東洋の宣教に対する激励がこめられていたにちがいない。このときＤ・Ｄ・を授与された人々もあったが、牧師総長だった原田が、カンタベリー大主教らと共にＬＬ・Ｄ・を授与されたことは、やはりそれが最高の名誉学位に格付けされていたことを示すものである。

原田はこの年、英国から米国にわたり、ハートフォード神学校、ハーバード大学等で講演したのちアーモストを訪問、十一月十日の四十七歳誕生日にアーモスト大学で講演したあと、Ｄ・Ｄ・の学位を贈られたのである。「三十数名の教授連は皆夫々ガウンを着用してこの授与式に臨んだと原田は日記に記している。ＬＬ・Ｄ・でなくてＤ・Ｄ・を与えられたのは、すでにエディンバラからＬＬ・Ｄ・を与えられている以上、異った種類をアーモ

えることは、長い期間にわたり、ＬＬ・Ｄ・は最高の名誉学位とみなされてきた、ということである。アーモストの場合、卒業生がどこの学長になったり、上院議員に当選した場合、ＬＬ・Ｄ・を授与し、母校としてその

息子の功績を認めることが長い間の慣習だったように思われる。と同時に、ウィリアムズ大学、スミス大学、マウントホリヨーク大学、マサチューセッツ州立大学のように、近くて親しい大学の総長には、なるべく早い機会にＬＬ・Ｄ・を贈って敬意を

ストが選んだ、と理解できよう。

そこで上野先生のL・H・Dである。学位授与の理由書を読めると、総長が英文学者で、しかもチャーサー学者であり、『カントベリー物語』のひそみにならって、ロンドンからカントベリーまでの道のりを「押し寄せる車の波のものとせずに自分の足で歩き通した」ことまでがうたわれている。近頃の米国諸大学の傾向はますます名誉学位にバラエティをもたせ、理学博士、音楽博士、美術博士なども出し、L・L・D・Dが政治家、行政家、法律家むけの学位になってきている。それを反映した上でのL・H・Dであったように私は思うのである。

上野総長は同志社人としては新島、原田に次いで三人目のアモスト大学名誉学位の受領者であるが、日本人としては七人目に当るようである。順序は次の通りである。新島(L・D・一八八九)、高平小五郎(L・L・D・一九〇九)、原田(D・D・一九一〇)、神田乃武(L・L・D・一九二二)、樺山愛輔(L・D・一九三五)、高木八尺(L・H・D・一九五五)、上野(L・H・D・一九八〇)。このうち新島、神田、樺山はアモスト大

学の正規の卒業生である。高平小五郎(一八五四—一九二六)は小村寿太郎とともにポーツマス条約締結のときの日本全権をつとめた外交官で、一九〇九年五月七日、駐米大使としての彼は新島の肖像画の前で記念講演し、その機会に名誉学位を授与されたのである。

神田はアモスト大学の一八七九年卒業生で、文科大学教授、外国語学校長、貴族院議員を歴任した人で、特に日本における英語教育の発展に大きな足跡を残した。薩摩出身の海軍大臣の息子であった樺山は一八八九年にアモスト大学を出た。はえぬきの国際人であって、戦前の船舶の時代に渡米すること十数回に及び、ロンドン軍縮会議には日本代表の一人として出席した。日米協会の会長を長らくつとめた。高木は東京大学法学部教授としてアメリカの政治史を講じた人で、神田乃武の子息にあたる。日本におけるアメリカ研究の開拓者として令名が高い。

ところで同志社関係者としてアモストから名誉学位を受けた人といえば、同大学卒業生でアメリカン・ボード宣教師として来日した四人の人々を逸するわけにいかない。宣教師だっただけに、四人とも名誉神学博士(D・

D・)を授与されている。順番に書くと、オーテス・ケリー(一九〇四)、ホレイシヨ・B・ニューウェル(一九二三)、E・S・カーブ(一九三五)、フランク・ケリー(一九六一)である。

オーテス・ケリーはアモスト大学代表である同名のケリー教授の祖父にあたる。アモストでも神学校でも新島の二年後輩だった。岡山で宣教に従事したのち同志社神学校教授となり、教会史、説教、社会学を担当した。フランク・ケリーはその三男で北海道を中心に伝道した。戦後いち早く来日し、アメリカン・ボードの宣教活動を指導した。一九四八年—五〇年同志社の理事をつとめ、同志社からも名誉神学博士号を授与されている。カーブは一九〇九年から四一年まで同志社神学校において新約、旧約、旧約外典の領域で研究と教育にはげみ、京都大学から日本の文学博士号をも獲得した。

ケリー父子とカーブについては『同志社百年史』が略述しているが、ニューウェル(一八六一—一九四三)のことは比較的知られていない。彼は一八八三年のアモスト大学卒業生で、宣教師として一八八七年に来日し、

ただちに新潟県長岡に派遣され、九二年までの五年間をその地で伝道し、そのあと新潟に十二年、松山に十九年伝道した。話術がうまく、ポケットの中にいつもヘビをしのばせており、それを上手に取出して子供らを魅きつけたという。そのようにして魅きつけられたかもしれない子供の一人が、のちの山本五十六元帥であった。ニューウエルスの長岡滞在は山本の三歳から八歳までに当る。阿川弘行の『山本五十六』には、山本の父高野貞吉の日記から「曇、日曜、五十六耶蘇へ行く」が引用されている。耶蘇とはむろん教会のことである。「晴、大暑、ニューエル氏新潟移住に付蔵王迄見送る」という記事もみえる。兵学校生徒時代の山本はバイブルを持っていたといわれる。山本が最初に聞いた英語はニューウエル宣教師のそれであった。このニューウエルは一九〇五年から二八年まで同志社の理事をつとめた。そして連合艦隊司令長官山本五十六が太平洋上に壮烈な戦死をとげた一九四三年に、彼の少年時代の宣教師もまた海の彼方の米国で八十二歳の天寿を全うしたのであった。

(大学文学部教授)

新島襄関係文献(抄)

LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NEESIMA

- | | |
|-------------------------------------|------------|
| 同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意―口語改記並原文― | 同志社大学出版部 |
| 同 志 社 | |
| (森中章光編)「新島襄書簡集」続編 | 同志社校友会 |
| (同志社編)(新島襄書簡集)―岩波文庫 | 岩波書店 |
| (J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳) | |
| 「新島襄の生涯」 | 小学館取扱校友会 |
| 「新島先生記念集」 | 同志社校友会 |
| 「明治文学全集第四六巻」 | 筑摩書房 |
| (新島・植村・清沢・綱島集) | |
| (J. D. DAVIS)「JOSEPH HARDY NEESIMA」 | 同志社 |
| (森中章光著)「新島襄片鱗集」 | 丁子屋書店 |
| (森中章光著)「新島先生と徳富蘇峰」 | 同志社 |
| (森中章光著)「新島襄先生詳年譜」 | 同志社・同志社校友会 |
| 「新島八重子回顧録」 | 同志社大学出版部 |
| (徳富蘇峰著)「新島襄先生」 | 同志社大学出版部 |
| (魚木忠一著)「新島襄一人と思想」 | 同志社大学出版部 |
| (岡本清一著)「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| (同志社社史史料編集所編) | 同志社大学出版部 |
| (同志社百年史(通史編I・II)) | 同志社大学出版部 |
| (同志社百年史(資料編I・II)) | 同志社大学出版部 |
| (和田洋一著)「新島襄」 | 同志社 |
| 雑誌「新島研究」 | 同志社 |
| | 日本基督教団出版局 |
| | 同志社新島研究会 |